
玉井哲雄先生を送る

坂本 稔

玉井哲雄先生は1947年、兵庫県西宮市のご出身である。東京大学工学部建築学科を1970年にご卒業された後、同大学院修士課程（1972年修了）、博士課程に進まれた。日本建築史を専攻されたが、ご本人は近世都市史研究者として研鑽を積まれたそうである。1977年に同課程を単位取得満期退学されてすぐに、千葉大学工学部に講師として採用され、翌1978年には東京大学から工学博士の学位を授与された。千葉大学では1980年に助教授、1995年に教授に昇任され、研究と教育に携われた後、2006年に国立歴史民俗博物館研究部教授に着任された。歴博においてもさまざまな方面で活躍され、このたび定年を迎えられることとなった。分不相応ではあるが、先生と少しでも縁のあった者として先生の業績を紹介させて頂きたい。

先生は江戸の都市史を専門とされ、都市空間を復元してその歴史的な特質に迫り、町並の形成過程や都市構造との関係を明らかにしようとした。建築史の方法のみならず文献史料や写真・絵画の調査、民家調査、さらには考古学による発掘遺構の調査にも従事された。建築史という枠にとられない自由な発想が、視野の広い研究としていくつもの成果に結実している。

千葉大学にいらした頃から、先生は開館前夜にあった歴博（1981年4月設置、1983年3月開館）とも浅からぬ関係にあった。設立当初から歴博は研究の大テーマの一つに“都市”を掲げていて、第1期共同研究「都市における生活空間の史的研究」のサブテーマである「近世都市江戸町方の研究」（1981～1985年度）には、既に研究分担者として先生のお名前を拝見することができる。続く第2期共同研究「都市における生活空間の史的研究」のサブテーマ「都市絵図・都市図の総合的研究－洛中洛外図屏風・江戸図屏風」（1986～1991年度）にも共同研究者の一人として名前を連ねている。この間、1986年から3年間は歴史研究部（当時）の助教授を併任された。共同研究の成果は企画展示「描かれた江戸」（1991年10月10日～11月24日）として一般に公開されたが、当然ながらその展示プロジェクトにも参画されている。

建築史に携わるお立場から、先生は多くの建物や町並の保存修理、あるいは復元・模型設計の指導に関わってこられた。かつて歴博は文化庁や東京国立博物館から借用・管理換した精巧な1/10建築模型を複数収蔵し、「日本の建築」としてたびたび展示されてきた。ところが先生が歴博に着任されたのは、その多くが2005年の開館を控えた九州国立博物館へと移された後のことであった。待望された建築史教員の充実にも関わらず資料に限られるという事態の中、先生は早速「日本の建築－床の間・違い棚・書院の成立－」（2007年1月10日～2月12日）、「日本の建築－旧花田家番屋と鯉漁場－」（2008年1月16日～2月11日）という2本の企画展示を実現された。なかでも後者は、番屋の所在地である北海道小平町や鯉漁場の関連施設などの調査・聞き取りなどを踏まえ、鯉漁の記録映像や道具類の写真などを用いた立体的な展示となった。大規模なものではなかったが、

実地の調査研究に基づく堅実な展示として、少なからず感銘を受けたことを覚えている。

もっとも、先生の興味は日本にととまらず、既に東アジアに広がりつつあった。千葉大学にいらした頃に取り組みされた住居の形成過程に関わる調査研究は日本列島の北と南を飛び出し、中国、韓国、台湾へと対象が広がっていった。着任早々、歴博では共同研究「東アジア比較建築史研究」(2006～2008年度)を主宰し、日本建築の歴史を日本列島内で完結したものと見なす一国建築史から脱却して、寺院・神社、宮殿・城郭・民家などを通して中国、韓国などとの比較研究を進め、東アジア、さらには世界を意識した日本建築史の再構築を展望された。科学研究費なども有効に活用され、韓国、中国、台湾、ベトナムなど積極的に現地へ赴き、写真や図面だけではなく実際の建築を調査された。また、毎年のように国際シンポジウムを開催し、東アジアの研究者間の交流を深められた。それらの成果は、企画展示「日本建築は特異なのか－東アジアの宮殿・寺院・住宅－」(2009年6月30日～8月30日)として結実した。東アジアにおける日本建築の位置づけを、中国、韓国の建築と歴史的な観点で比較して示したこの展示は、建築そのものを歴博で取り上げた初めての大規模な企画展示となった。引き続き先生は共同研究「建築と都市のアジア比較文化史」(2009～2011年度)にて、いよいよ南アジア、東南アジアを視野に入れた研究に取り組みされた。日本の歴史と文化の調査対象を遠くインドにまで求めたのは、恐らくこれまで歴博では具体化しなかった研究であろう。その意味で、先生は歴博においても先駆的な研究を続けられたことは間違いない。

これほどの業績を挙げられつつも、先生はいつも笑みをたたえ、柔和で穏やかな表情で接して下さった。一方で、ある研究会でご一緒させて頂いた際には普段あまりお見かけしない真剣な表情で発表者に論文執筆を勧める姿があり、研究に対して真摯に取り組んでいらっしゃる様子を垣間みることもできた。

研究に調査に多忙な日々を送られる中、先生は2007年、2010・2011年と運営会議の館内委員を務められ、大所高所からの歴博の運営に関わられた。また教育においては、総合研究大学院大学の文化科学研究科日本歴史研究専攻の教授を併任され、建築史の立場からの文献、絵画、伝承や発掘遺構調査などの資料論、先生の主要な研究テーマである東アジアにおける日本建築論において後進の指導にあたられた。

歴博にいらしたのは7年間という限られた時間ではあったが、冒頭で述べた通り、先生の歴博との関わりは設立当初にさかのぼり、歴博にとってなくてはならない存在であったことは疑いない。視野は世界に向けられ、既存の考えにとらわれず実物・実地の調査を重んじる姿勢は、研究者として大いに学ぶべきである。歴博を退かれた後も、きっと世界中を駆け回りつつ、日本の建築や都市・町並の歴史的な位置づけに携われることであろう。健康にご留意された上で、後輩たちへのご指導を賜りつつ、今後ますますのご活躍を期待いたします。